

「JISA版NTCプロジェクト」 第1期活動結果報告

情報サービス産業協会 人材委員会

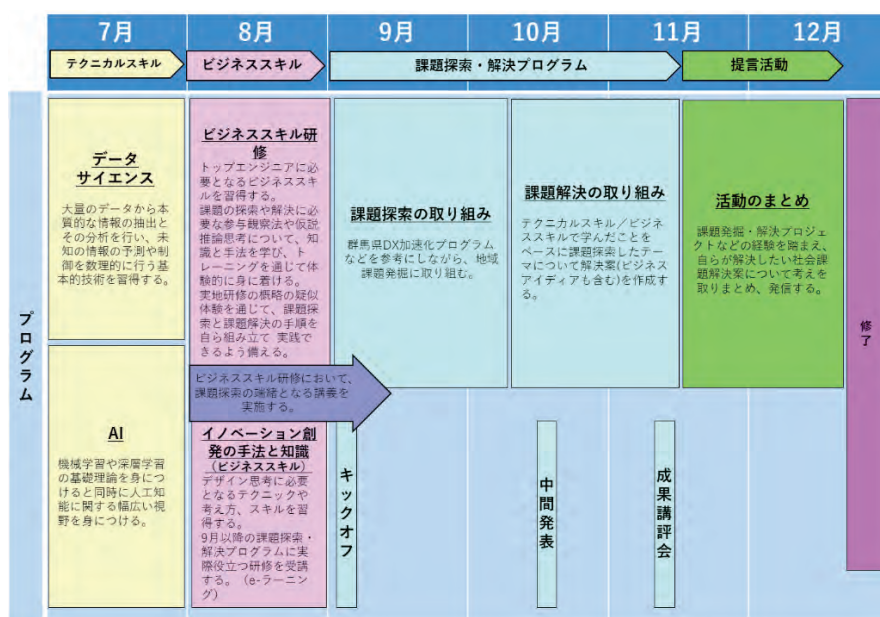
人材委員会では、令和4年7月より12月までの6か月間、我が国トップレベルのデジタル人材の育成を目的にした「JISA版 NTCプロジェクト」のコアプログラム、「第1期 トップITアスリート育成プログラム」を開講してきた。

本プログラムには、デジタル人材としての相応の技術力ならびに実務経験を既に有し、将来、トップ人材として社会に貢献する高い志を有する少数精鋭の人材に参加してもらった。そこで、大学院修士課程レベルに水準を設定した、高度な論理思考力と、技術スキルの習得プログラムを受講した上で、参加者が他の参加者と互いに切磋琢磨しながら社会課題の探索および解決策の探求を実体験できるようなプログラムとした。

本号では、第1期活動の振り返りをするとともに、特に、第1期受講生がこの6か月で学んだこと、今後取り組みたいことについて報告する。

第1期トップITアスリート育成プログラムの概要について

本年度は、テクニカルスキルとビジネススキルを習得の上、自らの知力とそれらのスキルを駆使して、群馬県における地方創生DXの推進を目的にした課題探索から解決策までをデザインする「体験型研修」を実施した。



なお、本年度のプログラムや9月まで実施したことについては、JISA会報（No.147）にて報告している。そちらを参考にして欲しい。

https://www.jisa.or.jp/public_info/transaction/tabid/3485/Default.aspx

課題探索・解決プログラムでの発表結果について

9月より取り組んでいた課題探索・解決プログラムでは、11月7日（月）群馬県庁32階の官民共創スペース「Netsugen（ネツゲン）」において、各チームが検討してきた内容についての発表会が開催された。各チームの発表内容は以下の通り。

【教育・地域政策チーム】

人の目ではとらえきれない情報を使った保育の質の向上と、温泉観光地の回遊性と稼働率を高めるための温泉サブスクの仕組み構築。

【こどもチーム】

児童虐待の予防に関する取り組み。子供を授かったご夫婦に向けて子育て知識をつけてもらう研修を実施する。しつけがエスカレートして気付かぬ間に虐待に至ってしまうようなケースを防ぎたい。

【観光チーム】

ぐんまPayの提案 自治体Pay × 観光地周遊（お題コンプリートでボーナスポイント）で群馬県内の経済を循環させる。

【文化・魅力発信チーム】

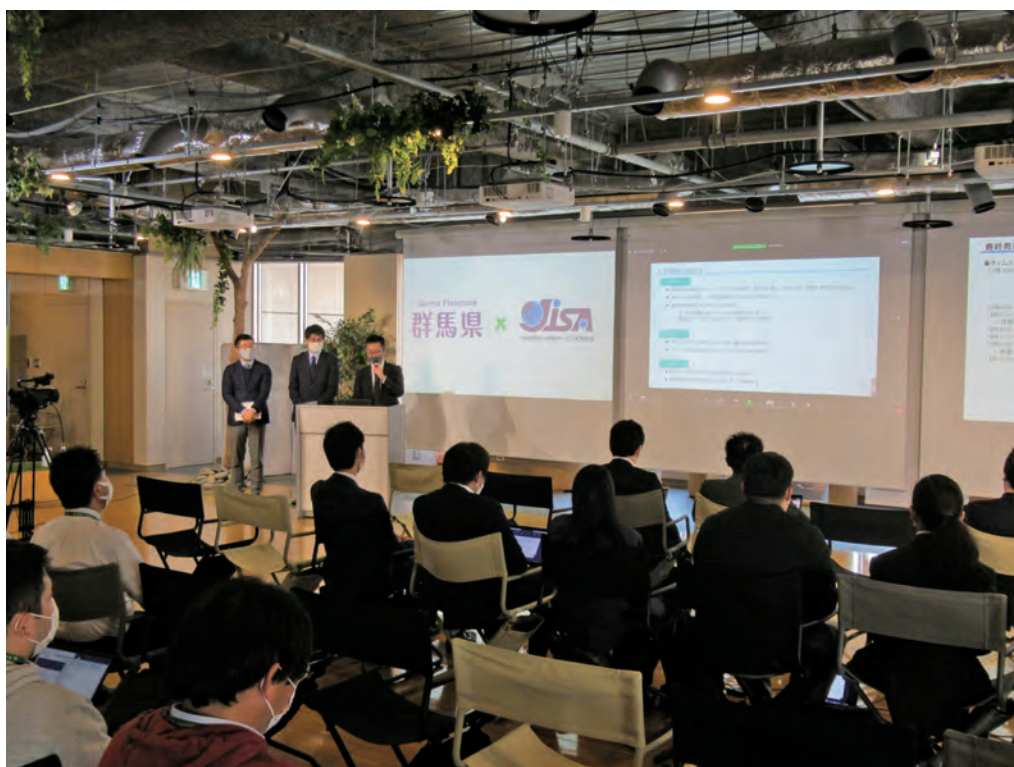
メタバースを利用して、群馬県の魅力を発信、創出する。課題テーマは、クリエイティブ拠点の構築と歴史文化振興としている。

【農業（こども食堂）チーム】

「こどもの幸福度」向上。SDGsの目標の一つである「貧困をなくそう」を群馬県で実現する。

当日の発表動画は以下より視聴できる。

<https://youtu.be/ozlFg7o1Vhk>



修了式について

12月20日（火）にJISA版 NTCプロジェクト修了式を開催した。当日は、原会長の開会挨拶から始まり、課題探索・解決プログラムの優秀賞授与や修了証書の授与をおこなった。

続いて、課題探索・解決プログラムにおいてメンタとして受講生に指導いただいた、芝浦工業大学 平田先生、野村総合研究所 新井様よりプログラムへの講評があり、最後に、福永人材委員会委員長より閉講の挨拶があった。

【原会長ご挨拶 要旨】

7月から初めて6か月間の長丁場の研修、よくぞ挑戦して頂いたという気持ちです。我が国も様々な社会課題を抱えているが、その一つに人材不足があります。人口減少にあたり働き手が減っていくことは避けられないのですが、社会課題に対しデジタルを使って変革するのに相応しい優れたデジタル人材を育成することが必要であると考えています。

今までのエンジニアは必要であるし、この業界の業績は非常に良いことは事実ですが、よりパフォーマンスが高い人材、社会を変革する人材を業界から輩出していきたいという想いで本プロジェクトをスタートさせました。

今回、14名の方が本研修を通じて、刺激し切磋琢磨し合ったことと思います。それそのものが大変な財産であると考えています。2030年に向けたビジョンステートメントである「デジタル技術で人が輝く社会を創る」ということにJISAとして本気で取り組んでいきたいと思ひますし、皆さんと一緒に人が輝く社会を創っていききたいと考えています。

【JISA版 National Training Center プロジェクト 課題探索・解決プログラム 優秀賞】

群馬県県庁関係者からの選定と、JISA人材委員会において、課題の探索、課題解決のアプローチ、プレゼンテーション力総合評価の3項目で評価をし、優れた取り組みとして優秀賞を以下チームに授与した。

A 教育・地域政策チーム

■澤登 優（三井情報株式会社） 田中 伸幸（SCSK株式会社） 早川 智洋（株式会社中電シーティーアイ）



本活動を振り返って 受講生より

本プロジェクトで学んだことや、今後取り組みたいこと、また、達成できなかったことも含め、受講生の意見を紹介する。6か月間という研修期間で、どのようなことを学び感じたか参考にして欲しい。

なお、紙面の都合上、今後取り組みたいことについて事務局文責のもと一部の意見を集約し紹介するが、学んだこと、今後取り組みたいことは、次期企画を策定するにあたり大いに参考にしている。

【阿良田 康浩（株式会社DTS）】

ビジネスモデル研修の中で、イノベーションマネジメントに関する世界の潮流ということで講話いただいた内容についても社内に持ち帰りたい内容でした。JIN（一般社団法人Japan Innovation Network）にて、ISO56002としてイノベーションマネジメントシステムを規格化しているとのことで、自社でも社内開発標準としてPMBOK（Project Management Body of Knowledge）などをベースにしたものはありますが、イノベーションマネジメント標準はないため、イノベーションマネジメントの潮流を取り込み、デジタル人材のロールモデルとして今後活動していくことで感謝を表していきたいと考えています。

【石井 教観（株式会社日本ビジネス開発）】

イノベーションへの関わり方として、作り手の立場としてのみ参画できるのであれば、システム開発・データ分析などのフィールドで続けていきたいと考えています。本プロジェクトで得られた知見の社内展開につきましては、適宜行っていきたいと考えています。この中で、学んだ内容を参考しやすくなるようまとめていきたいと考えています。

【小泉 崇央（NECソリューションイノベータ株式会社）】

今後取り組みたいこととしては2点あります。

1点目は、現在のビジネスモデルの継続的な検討です。こどもチーム、農業チームともに群馬県庁の皆様からいただいたフィードバックを元に、他のメンバの意見も伺いながら更なるブラッシュアップをしていきたいと考えております。

2点目は、現在私が行っている新事業支援ならびにリサーチ業務に関して、今回学んだ件を取り入れていきたいと考えております。現在デスクリサーチがメインですが、ヒアリングにより重きを置いていきたいと考えています。ローデータを収集することで、加工された情報からは得られないインサイトが得られると今回の研修を通じて実感したからです。

【澤登 優（三井情報株式会社）】

NTCプロジェクト内で企画したソリューションの実現

私は、このプロジェクトで企画したソリューション案を実現させたいと考えています。限られた時間の中での取り組みであることから、企画自体に様々な改善点や更なる検討事項はありますが、多くの方にヒアリング調査のご協力をいただき、課題を解決したいという強い思いも伺っています。これを研修という形で終わらせることなく、実現させることにより私自身の経験にもなるとの考えもあることから、今後も継続して取り組んで参りたいです。

NTCプロジェクトで学んだことを部署内や社内へ還元する

このプロジェクトへの参加は社を代表して参加したことから、学んだことを自らが業務の中で活かしていくことはもちろんのこと、様々な形で社内への還元をしていくことが求められていると考えています。まずは普段の業務で接することの多い部内に向けて報告会を開催したり、業務を通じて都度学んだことを伝えたりすることで還元して参ります。また、社内全体にも還元できるような方法も検討したいと考えています。

NTCプロジェクトで学んだことを活用した新規事業企画

私はこのプロジェクトを通じて、新規事業企画に必要な要素を一通り学び、経験できたと思っています。新しいことを考えて、実現させていくことは事業の中で最も難しいものの一つであるということは今回の取り組みの中で痛感しました。しかし、実践的なプログラムを通じてその一端を経験し試行錯誤を重ねる中で、自分の中で「上手くいったこと」「上手くいかなかったこと」、両方の経験をすることが出来ました。そのような経験は通常業務の中ではなかなか経験できることではないと考えています。よって、このような学びや経験を活用するには新規事業企画を行うことが最も直接的かつ効果的であると考えています。

【高熊 大将（株式会社オーイーシー）】

今まで社会課題を他人事と捉えてしまうことが大半でしたが、今回のプロジェクトに参画することで様々な課題をより身近に感じるようになり、群馬県が大好きになりました。今でも「群馬県」や本プロジェクトで対象になっていた社会課題がメディアに取り扱われていると目を止めてしまいます。今後も、先端技術はもとより今回取り扱わなかった社会課題に関する情報にアンテナを高く広く持ちたいと思っています。

今回のプロジェクトでは社会課題に対する提案が1つのゴールでしたが、これを契機としてICTを活用した社会課題解決の実現に向けて引き続き取り組んでいきたいと思います。

【武井 章（株式会社SRA）】

今後取り組みたいことは「IT技術を活用した提案により、新たにマネタイズが可能となる施設やサービスに関する事業を創ること」です。群馬歴史博物館様のヒアリングで印象的だったのが、「施設本来の目的は収益の増加ではなく、歴史文化の発展や流布であるが、マネタイズをより実現できれば更に歴史文化の発展に繋がるような新たなコンテンツ創出や拡充ができる。そこにIT技術の活用を期待している」といった意見をいただいたことです。地方創生自体にも同じことが当てはまると思いますが、実際にその分野や社会課題に取り組んでいる方々の声を聴いて、それらが実現できる新事業の創出はとてもやりがいや意義のあることになると改めて感じました。自社を含め、JISA会員企業ではそれを実現するため技術は既に持っているの、そこに課題解決のプロセスを組み合わせることによって実現できると考えています。私自身はイントレプレナーという役割を目指して今後につながる取り組みを推進していきたいと思いました。

【田中 伸幸（SCSK株式会社）】

技術（データサイエンス・AI）・知識（ビジネススキル）の習得のみならず、それらの実践機会を通じて体験的にビジネスの企画・立案を経験できました。そこでは「技術・知識」を「ビジネス」まで昇華させることの難易度を、改めて痛感しました。

自社においても「技術・知識の活用」と「ビジネスの企画・立案・提案」に携わる社員は明確に役割や所属が離れています。しかし、各々の社員が相互作用する機会を得ることで自社内のDX化推進は更に加速できると考えています。そのためにも「技術・知識」と「ビジネス」の双方に理解があり、それぞれのスペシャリストを繋ぐことできる人材、社員数の底上げは必須であると考えています。

まずは研修で培った技術（データサイエンス・AI）・知識（ビジネススキル）を所属組織内で伝播することで、「技術・知識」と「ビジネス」の双方について興味関心を持った社員数の底上げに貢献したと思います。また、自身も「技術・知識」と「ビジネス」の両輪で、社内外人材を繋ぐというアプローチから社会の新規価値創造に貢献したいと思います。

【長島 大貴（株式会社TOKAIコミュニケーションズ）】

本プロジェクトの経験を所属部署にフィードバックするとともに、これまでは出してこなかった自分の個性を社内へ向けてアピールしていきます。そして、仕事とプライベートの結びつけの実現に向けて動いていきたいと考えています。具体的には、今回作ることができたメタバース事業者とのコネクションを活用し、社内へ向けての事業提案をしていきます。先日実施した上司へのヒアリングで、自社が抱える課題をいくつか聞くことができていたので、まずはその解決策を考え、提案としてまとめていきたいです。

【成澤 岳志（JFEシステムズ株式会社）】

NTCプログラムを通じて、先進技術の理論だけでなくその活用方法と、実践を通じた気付きによって課題解決を図る実行力を得ることができました。本プログラムで検討したテーマはここで終わりではなくスタートラインであり、今後も検討を継続して事業化に漕ぎつけたいと考えています。

さて、Top ITアスリートに私はなれたのか？という疑問であるが、控え目ではあるが自信を持ってYesと言いたいです。知識や技術は確かにビギナーレベルであるが、Top ITアスリートとしてのマインドセットは十分に持ち合わせているからです。

【早川 智洋（株式会社中電シーティーアイ）】

新規事業への挑戦

今回のプロジェクトの経験を活かし、会社への新規領域への事業拡張の働き掛けや、個人的な新規事業への挑戦を今後も取り組んでいきたいと考えています。もともと起業家の集まりなどへの参加は行っていましたが、今後も活動を続け、アイデアを形にすることを目指し活動します。

ヒアリング技術の活用

今回のプロジェクトで培ったヒアリングの技術は、普段のファシリテーションやマネジメントの基礎となる1 on 1 などでも応用できる。普段からヒアリングのやり方に気を配り、質の高いヒアリングができるように取り組みたいです。

社外の活動への参加

会社間の人材との交流や、全く違う分野の人と話すことは今回とても刺激になったため、今後も社外での活動を続けていく。外に目を向けることで、広くアンテナを張り、テクニカルスキルの他にもビジネススキルのにも多くのことを取り込みたいです。

【白 清輝（株式会社アイネス）】

当プロジェクトに参加した事により、自社の新規事業計画に際し、データ分析や市場調査が圧倒的に足りていない事を自覚しました。DX開発部として新規事業を創出するにあたり、当プロジェクトの研修で学んだ事を応用して、計画の立案やレビューを行います。

また、自社に対して社内起業制度の立ち上げを提案したいと考えています。当プロジェクトで社内起業のメリット、デメリットを多く学ぶ事が出来ました。現在弊社にも事業投資申請の制度はあるものの、起業に至るものではなく、申請書の設計や申請までのフローのテンプレート化、最適化がされていない事が当プロジェクトに参加して気付きました。現在の投資申請に従って作成された申請書や計画書で却下されたものを多く見て来ましたが、アイデア自体は悪いものばかりではなかったと思っております。それらのアイデアに足りないものを補えるよう申請制度のバージョンアップ、社内起業制度の設計をすべく、来年度から着手をしたいと考えています。

【守時 義晶（株式会社リンクレア）】

「私自身の成長」および「社内への還元」の観点から、今後取り組みたいことは以下の通りです。

まず「私自身の成長」という観点において、本活動を通して「周囲を巻き込む」ことが重要であることを学んだため、さまざまな価値観をもつ方々と積極的につながりをつくりたいと考えております。これまでの交流を振り返ると、同業種の方々ととのつながりが多く、異業種の方々ととのつながりが少ないので、業種が異なる方々との交流を特に深めていく必要があるのではないかと感じております。さまざまな価値観をもつ方々との交流を通して、社会を多角的に見る力が養われ、ビジネス課題や社会課題解決に貢献できるような人材となれるよう努めてまいります。

次に「社内への還元」という観点から、本活動で学んだことを私自身の中に留めるのではなく、社内メンバに伝えていきたいと考えております。提案までに必要な計画立案方法やフィールドワークを含む調査方法等を社内メンバに伝えることで、これまでとは異なる提案までの道筋をつくることができるのではないかと感じております。特に、現場を「見る・理解する」ためのプロセスは、課題を正しく理解するためにも活用していくのがよいのではないかと考えています。ただし、本活動で学んだプロセスを単に実践するだけではなく、既存の方法と組み合わせて、ブラッシュアップすることも今後必要になるかと思えます。そのためにも、まず本活動で学んだことを社内メンバへ伝え、ディスカッションをしながら、課題解決に向けたよりよい提案ができるように工夫していければと思います。

【山田 周策（株式会社TOKAIコミュニケーションズ）】

まずは自分自身の目標として、今回の学びを活かす動きを取っていきたいと考えています。具体的には以下の2つとなります。

- ・データセンタ運用部門に対し、イントレプレナー提案を実施
- ・他データセンタ事業者に対しサービス提供

顧客との守秘義務もあり、他社データセンタにてエスノグラフィを実施することはなかなか難しいかと思えますので、まずは自社データセンタにおいて実施し、イントレプレナー提案まで実施できればと考えております。その後、他データセンタ事業者へのサービス提供を行っていきます。

次に組織の目標として、今回学習した知識・経験を会社に還元し、組織としてのイントレプレナー人材の育成を図っていきます。今回学習したイントレプレナーに必要な知識、メンタリティ、考え方、行動など、自分なりに解釈した内容をまとめ、社員に対し教育を行っていければと考えております。

上記、自社データセンタ運用部門に対するイントレプレナー提案も、できれば数人でチームとなり実施していくことができれば、今回の研修のように講義→実地体験ができ、良い体験になるのではないかと期待しています。